

## 研究ノート

## その蛇に翼はあるか

—D. H. ロレンス長編小説の題名訳について—

京都先端科学大学 経済経営学部

諸戸 樹一

Email: moroto.juichi@kuas.ac.jp

**Abstract**

Fewer points are usually given to translations than to articles in academic performance evaluation. However, it is really harder to translate English into Japanese in the field of literature. In this note, I try to show how tough it is by discussing Japanese translations of the titles of D. H. Lawrence's novels as an example. Even if the title has only a few words, it is not so easy a task to translate it into Japanese.

D. H. Lawrence wrote 12 novels including a joint work and a posthumous one. Some of them have no indisputable Japanese titles such as *Kangaroo*. And as for a couple of them, even if there is any doubt, it is about one word only of each title. On the other hand, some existing Japanese titles of the following four novels: *The Trespasser*, *Sons and Lovers*, *The Lost Girl* and *The Boy in the Bush*, might mislead or confuse the readers. I try to discuss a felicitous choice of Japanese words for those titles. And finally, I try to suggest an appropriate Japanese title of *The Plumed Serpent* based on the assumption that the serpent has no wings.

キーワード: D. H. ロレンス、長編小説、題名、翻訳、翼ある蛇

**序 和訳の難しさ**

業績が点数化されるところでは、通常、論文のほうが翻訳よりもポイントが高い。しかし、他分野のことはいざ知らず、英語文学においては、この分野の多くの方の賛同を得られると思うのであるが、論文を書くよりも翻訳をするほうが難しい。もちろん、別格は常に例外扱いとすべきなので、価値の高い別格の論文との比較はしないでおく。

論文の場合には、論の対象となっている英語文学作品をきちんと理解したかどうかまでは問われない。もちろん、全面的にきちんと理解していることが前提ではあるのだが、論文の論旨に沿った理解ができていれば問題は生じないはずである。悪く言えば、論展開にとって都合のよい解釈ができていればそれ

でよい。しかしながら翻訳では、よく理解できない箇所があるからと言ってその箇所を省くわけにはいかない。翻訳者の責任において、どの語もどの句もどの節もことごとく筋が通るように、読者によく分かるように解釈しなければならない。これを例えば、D. H. Lawrence (1885-1930) の *The Plumed Serpent* (1926) の場合には、Penguin Books 版で 462 頁までとことん続けていかなければならない。全体で何語あるのか数える気は毛頭ないが、章題名を含むために語数が比較的少ない最初のページだけでも 320 語はある。

英語から日本語への翻訳者の苦労は、恐らく西欧語同士の翻訳者の知るところではないであろう。例えば、同じ D. H. Lawrence の *Lady Chatterley's Lover* (1928) の題名訳は、フランス語では *L'Amant de Lady Chatterley* である。Lover が L'Amant de と仏訳されてはいるものの、日本語への訳者であれば少なくとも 2、3 の訳語候補を検討する *Lady Chatterley* については原語そのままである。

本ノートにおいては、従来の題名訳に関して一部異論を述べるころはあるが、異論を述べるのが本旨ではない。数語の題名を訳すだけでもいかに難しいかを実例に基づいて述べるのが本旨であり、いずれの作品であれ、それぞれ大部のロレンスの長編を最後まで訳し切ったそれぞれの訳者に対しては心から敬意を表するものである。

「1」では、D. H. ロレンス長編小説の第 1 作を取り上げて、題名訳がどのような問題であるかを示す。「2」では、異なる題名訳が考えにくい 4 作品に言及する。「3」では、相違があるとしても部分的な問題に過ぎない 2 作品の題名を手短に取り上げる。「4」では、相違が題名訳全体に及ぶ問題を原作初版の年代順に取り上げていく。最後に「5」では、「3」にも「4」にも分類できなかった *The Plumed Serpent* の題名訳の問題点を個別に取り上げる。

## 1 「白孔雀」か「白い孔雀」か

D. H. ロレンス長編小説の題名和訳がどのような問題であるかを示すために、初めに第 1 作 *The White Peacock* を取り上げる。原作は 1911 年に出版されているが、日本では伊藤礼訳で中央公論社「世界の文学」第 34 巻に中編『セント・モア』とともに収められ、1966 年に出版されたのが最初である<sup>2</sup>。原作と翻訳との違いは単に言語だけでなく、出版年としても現れてくる。翻訳は、原作が出版された年代順に出版されるわけではない。そもそも全作品が翻訳されるわけでもない。長編第 3 作の *Sons and Lovers* (1913) や第 5 作の *Women in Love* (1920) の翻訳が 1936 年には日本で出版されているので、第 1 作が翻訳という形で日本に紹介されたのは、それから 30 年後ということになる。

今日までのところ、「白孔雀」との題名訳で出版されたこの翻訳書以外に翻訳はない。「白孔雀」で何の問題もなさそうであるが、紀要論文の中には「白い孔雀」、「白くじゃく」との題名訳も見出される。問題にするほどの違いはないと言われるかも知れないが、ここでは敢えてそれぞれの日本語題名から読者が受けると想定される違いについて言及したい。

先ず、「白孔雀」の場合には、そういう種類の孔雀を想起させないであろうか。実際、インドクジャ

<sup>1</sup> D. H. Lawrence (1926), *The Plumed Serpent*, Harmondsworth: Penguin books, 1950.

<sup>2</sup> D. H. ロレンス (1911), 伊藤礼訳『白孔雀』世界の文学第 34 巻 (ロレンス), 中央公論社, 1966.

クの白色変種として「白孔雀」が存在しており、「白孔雀」の場合にはそのような、生まれながらに羽根が白い孔雀の種類を想起させる。他方、「白い孔雀」にも同じ意味を持たせることは可能であるが、「白」ではなく敢えて「白い」としたことにより、本来であれば白くはない孔雀が白くなったと読ませることができるであろう。「白孔雀」と「白い孔雀」には、生物種として元来白い孔雀であったのか、それとも何らかの影響により白く変異した孔雀なのかの違いを読むことが可能であり、これは正にこの作品の主題の解釈とも絡んでくるところである。

本稿は、作品の主題に即してどの題名訳が適切かを結論づけるところまでを目的とはしていないので、筆者の現段階における考えを記すに留めるが、白孔雀が「変種」を象徴しているのは間違いのないとしても、white peacock は、もともとは白くなかったはずのものが白く変異してしまったという問題を象徴化していると考えている。

*The White Peacock* の「白さ」については、田淵弘之（1984）が既に‘black’や‘dark’とともに作品中の使用例を数え上げ、その意味を追究している<sup>3</sup>。作品の後半の第2部、第3部に至るにつれて、‘white’の使用頻度が増すと田淵の研究結果から考えても、作品では「白く」変異した問題こそが主題として取り扱われていると考えられる。

ちなみに、white peacock は登場人物のレティ（Lettie）を表しているとの解釈があるが、peacock と書かれている以上、たとえそれが孔雀全般を指す語であるとしても、cock という語からは女性を象徴すると読むのは難しい。女性に関わるのは peacock ではなく、形容語の white のほうであろう。前述の田淵弘之（1984）は、当時ロレンスが心酔していたと伝えられるショーペンハウアーの『愛の形而上学』を引用し、white についての「ショーペンハウアーの見解がロレンスに少なからざる影響を与えている」と述べて、「white」は『不自然』、『意図的』、『観念的』を表わす語と考えられる」と論じている。*The White Peacock* は、このような white に侵されて「退色」するに至った男性の問題が取り扱われている作品であると見なすことが可能であろう。

「白くじゃく」との訳については、なぜ「くじゃく」と平仮名になったのかが分からない。もし、常用漢字では「孔雀」という漢字を使用できないので平仮名にしたということであれば、生物名はカタカナで書くのが日本語表記の約束事でもあるので、もしそうであれば「白クジャク」のほうがよかったのではないであろうか。

## 2 『カンガルー』『虹』『アロンの杖』と『ミスター・ヌーン』

次に、異なる題名訳が考えにくい作品に一括して言及しておきたい。出版年代順ではなく、「異訳」が想定しにくい順に取り上げる。

典型的なのは、オーストラリアを舞台として書かれ、1923年に出版された *Kangaroo* であろう。作中で *Kangaroo* は、アンタゴニストとして登場する Benjamin Cooley のニックネームであるのだが、作品解釈においては新世界と旧世界とが入り混じった何か奇怪な様態の象徴とも読むことができる。いづれにしても *Kangaroo* を『カンガルー』以外の題名に訳すことは考えられない。日本では、1990年

<sup>3</sup> 田淵 弘之（1984），『白孔雀』における白さについて，『経済集志』第54号（別号1・2）（日本大学経済学部，1984），147-158.

に丹羽良治訳が出版されている<sup>4</sup>。

1915年出版の長編第4作 *The Rainbow* も異なる題名訳は考えにくい。日本では1924年に宮島新三郎・柳田泉訳で新潮社から出版されたのが最初と思われる。題名は『小説 虹』となっているのであるが、この「小説」については題名訳として付したものであるのか、それとも単にジャンルを示したものであるのかが分からない。

「虹」以外の題名訳が考えにくい *The Rainbow* であるが、しかし、定冠詞の *the* を無視してよいものであろうか。作者の意図が何であったとしても、キリスト教圏において虹と言えば、ノアの洪水の後に神が人類との約束のしるしとして示したあの虹を想起させるはずであり、この *the* は紛れもなく「あの虹」を示していよう。

1922年出版の *Aaron's Rod* も異なる題名訳は考えにくい。その理由は、この題名も聖書に基づくからである。初訳は、1937年に十一谷義三郎・崎山正毅により『アーロンの杖』との題名訳で出版されている<sup>5</sup>。Aaron という聖人名の訳については、「アーロン」以外には「アロン」「エアロン」の2つが紀要論文等に見出されるが、近年は「アロン」に統一されてきている。1988年刊の吉村宏一・北崎契縁訳も『アロンの杖』であった<sup>6</sup>。

筆者が問題にしたいのは、モーセのこの兄弟名よりも、むしろ *rod* のほうである。聖書の定番訳に基づくべきであるのは当然なので、「笏」とか「竿」とか「棒」とかには訳しがたいが、「錫杖」であればまだしも、「杖」では通常、『座頭市』の仕込杖は別として、足腰の弱ってきた人が体を支えるのに使う補助具しか想起されない。「笏」であれば権力の象徴としての *rod* となるものの、小説の舞台がキリスト教圏からは離れてしまう。「竿」や「棒」であれば作中での隠された意味—男性器の象徴—も含まれてくるように思われるが、『聖書』の訳語として使われることはないであろう。ハリー・ポッターの魔法の杖は *rod* ではなく *wand* であるが、あれも「杖」と訳されているので、今日ではあの映像に頼るのがよいのかもしれない。作中で *rod* とは主人公アロンが持ち歩くフルートのことを第一に指しているはずであり、フルートのイメージにいちばん近いのはハリー・ポッターの「魔法の杖」である。

*Mr Noon* は、1920-21年に書かれていた作品と推定されているが、長く未完と見なされ、ロレンスの生前には出版されなかった長編である<sup>7</sup>。死後数十年も経ってから後半部の原稿が発見され、1984年に初版の運びとなった。ケンブリッジ版 D. H. ロレンス全集 (*The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence*) の一巻として出版され、日本では森晴秀訳『ミスター・ヌーン』が直ぐその後を追っている<sup>8</sup>。「真昼殿」といった題名訳も考えられないではないが、少なくとも前半部に関しては滑稽な描写が含まれている点を考慮すると、「ミスター・ヌーン」というカタカナ訳でよかったと思われる。なぜなら、多くの人が『*Mr. ビーン*』というテレビ・映画のコメディを想起する可能性があるからである。森晴秀訳のほうが『*Mr. ビーン*』の初放映 (1990年) よりも先であるので、その影響を受けているわ

<sup>4</sup> D. H. ロレンス (1923), 丹羽良治訳『カンガルー』, 彩流社, 1990.

<sup>5</sup> D. H. ロレンス (1922), 十一谷義三郎・崎山正毅訳『アーロンの杖』, ロレンス全集第7巻, 三笠書房, 1937.

<sup>6</sup> D. H. ロレンス (1922), 吉村宏一・北崎契縁訳『アロンの杖』, 八潮出版社, 1988.

<sup>7</sup> 前半部は、ロレンスの死後、1934年に Secker 社から中編 *A Modern Lover* として出版されている。

<sup>8</sup> D. H. ロレンス, 森晴秀訳『ミスター・ヌーン』, 集英社, 1985.

けはないのであるが、翻訳では時系列的に原作ではありえない影響関係が生じうるし、生じてよいと考えている。分かりやすい翻訳を心がけるのであれば、ありとあらゆる方策、使えるものは何でも使う気構えが必要である。それほど英語の日本語訳は難しい。

### 3 *Women in Love/Lady Chatterley's Lover*

次には相違があるとしても部分的な問題に過ぎない題名を手短かに取り上げる。

1920年初版の *Women in Love* の日本語訳は、原作初版からわずか3年後の1923年に矢口達訳で『戀する女の群』との題で出版されている<sup>9</sup>。これに続くのは、1936年の伊藤整・原百代訳『戀する女』である<sup>10</sup>。1950年には福田恒存訳の『恋する女たち』が出版され、今日、書店等で入手できる翻訳は福田恒存のこの題名訳に従っている。*Women* と複数になっている以上、「恋する女」ではなく、「女たち」のほうが適切であるのは言うまでもない。他方、「恋する女の群」は、二人の姉妹を中心にプロットが展開していることを考えると、「群」は女性の大きな集団を想起させる題名となって不適切であろう。

ロレンスの作品で良くも悪くも最もよく知られているのは *Lady Chatterley's Lover* (1928) である。1950年初版の伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人』<sup>11</sup>が刑法第175条違反で起訴されたこともあり、この題名訳で全国に広まることとなった。*Chatterley* については和訳として「チャタレイ」以外に「チャタレー」「チャタリー」の3通りが存在するが、Aaronの聖人名訳と同様、これについては広まっているほうに従うのが余計な混乱を招かず賢明である。問題にしたいのは *Lady* のほうである。西村孝次は1965年に『チャタリー卿夫人の恋人』との題名訳で翻訳を出版している<sup>12</sup>。「夫人」と訳すだけでも上流階級の女性であることは伝わるかもしれないが、貴族(准男爵)の夫人であることを明確にするには西村孝次訳のように「卿」を付すのが適切であると考ええる。

主人公の夫の *Clifford Chatterley* は貴族であると言っても、准貴族に過ぎず、世襲のれっきとした貴族とは区別すべきであり、わざわざ「卿」を付すには至らないとの意見があるのは知っている。英語圏の文化の中で考えた場合にはその通りであるかもしれないが、日本語訳は日本語文化の中で考えるべきものであり、*Lady Chatterley* と *Lady* から固有名詞扱いされる夫人の名を訳すには、たとえ貴族としての位階は低くとも、貴族側の人物であることを示す「卿」が必要ではないかと考える。

なお、「チャタレイ裁判」で有罪判決の後、伊藤整の訳は一般には削除版でしか読むことができなかったが、子息の伊藤礼が1996年に削除箇所を「復活」させた完訳版を新潮社(新潮文庫)から出している。ただし、*Lady Chatterley's Lover* の完訳版そのものは、その20年以上も前の1973年に羽矢謙一訳が講談社(講談社文庫)から出されている。2004年には武藤浩史訳が筑摩書房(ちくま文庫)から出版された。いずれも題名訳は、「チャタレー」かまたは「チャタレイ」「夫人の恋人」であり、「卿」は付いていない<sup>13</sup>。

<sup>9</sup> デイ・エッチ・ローレンス (1920), 矢口達訳『戀する女の群』上・下巻, 天祐社, 1923.

<sup>10</sup> D・H・ロレンス (1920), 伊藤整・原百代訳『戀する女』, 世界長篇小説全集 10, 三笠書房, 1936.

<sup>11</sup> D・H・ロレンス (1928), 伊藤整訳『チャタレイ夫人の恋人』, 小山書店, 1950.

<sup>12</sup> D.H. ロレンス (1928), 西村孝次訳『チャタリー卿夫人の恋人』, 小山書店, 1965.

<sup>13</sup> 「卿」が付く題名訳は、西村孝次以外に、増口充訳『初稿チャタレイ卿夫人の恋人』(彩流社, 2005)がある。*Lady Chatterley's Lover*

#### 4 *The Trespasser/Sons and Lovers/The Lost Girl/The Boy in the Bush*

ここからは題名訳全体に相違が生じている問題を取り上げていく。取り上げる順序は原作初版の年代順とする。

*The Trespasser* (1912) の本邦初訳は、1964年刊の西村孝次訳『侵入者』である<sup>14</sup>。その影響もあり、紀要論文等では多くの場合、本作品は「侵入者」との題名訳で扱われてきている。1993年には2つ目の翻訳が山田晶子訳で出版されたが、その題名は『不倫』であった<sup>15</sup>。描かれているのはいわゆる不倫であるので、物語の概要を想像するには分かりやすい題名であるが、trespasser という行為者名を不倫という行為に転換するのは思い切りが良すぎたように思われる。D. H. ロレンス研究会は、2003年、当該作品題名を「越境者」と訳して研究書を出版している<sup>16</sup>。「侵入者」と「越境者」とにはベクトルの違いが感じられる。すなわち、何らかの境界線を越えて入り込んで来る者と、逆に、境界線を越えて出ていく者との違いである。そのいずれが適切であるかを考えるよりも筆者が目じりたいのは、紀要論文等で見出された残る2つの題名訳であり、特筆したいのは「罪人(つみびと)」との題名訳である<sup>17</sup>。その理由は、英国人が trespass という語にどこで「親しんだ」かにある。

英国国教会の祈祷では主の祈り (Lord's Prayer) に sin ではなく trespass も使われてきている。

Our Father, who art in heaven, hallowed be thy name; thy kingdom come; thy will be done;  
on earth as it is in heaven.

Give us this day our daily bread.

And forgive us our **trespasses**, as we forgive those who trespass against us.

And lead us not into temptation; but deliver us from evil.

For thine is the kingdom, the power, and the glory for ever and ever.

Amen. (emphases mine)

名詞の trespass が神や隣人に対する「罪」であれば、trespasser を神や隣人に対して罪を犯した者と捉えることが可能であり、本作品の題名にも当てはまるように思われる。とは言え、キリスト教、特に英国国教会圏外の者には分かりにくいいため、紀要論文等で見出されるもう一つの題名訳「侵犯者」のほうを筆者は用いたく思っている。

長編第3作 *Sons and Lovers* (1913) はロレンスを小説家として確立させた作品と言ってよい。本邦では『息子と恋人』との題名訳で翻訳が出版されてきている。2016年刊の小野寺健・武藤浩史訳も『息子と恋人』であった<sup>18</sup>。この題名訳には早くから問題が指摘されてきてはいるものの、『チャタレイ夫人の恋人』同様、この題名訳で定着している今、もはやこれを変えるのは無益な抵抗になるのかも知れない。翻訳書の題名はこの他には『息子たちと恋人たち』があるだけである。「たち」があろうがなかろ

には、最終稿の他に2つの原稿が存在しており、これはその第一稿 *The First Lady Chatterley* を翻訳したものである。

<sup>14</sup> D. H. ロレンス (1912), 西村孝次訳『侵入者』, 八潮出版社, 1964.

<sup>15</sup> D. H. ロレンス (1912), 山田晶子訳『不倫』, 近代文芸社, 1993.

<sup>16</sup> D. H. ロレンス研究会編, 『ロレンス研究—「越境者」』, 朝日出版社, 2003.

<sup>17</sup> 石川 勝久 (1999), 『罪人(つみびと)』(*The Trespasser*) のカルチャー・スタディ』, 『奥羽大学文学部紀要』第11号(奥羽大学, 1999), 1-32.

<sup>18</sup> D. H. ロレンス (1913), 小野寺健・武藤浩史訳『息子と恋人』ちくま文庫, 筑摩書房, 2016.

うが、これらの題名から読者が想像するのは、誰かの息子たちとその息子たちと恋愛関係を持つに至った女性たちの物語であろう。確かに作品には、主人公 Paul とその兄、そして Paul に関わる女性たちのことが描かれている。しかし、原題の *Lovers* は *Lady Chatterley's Lover* の lover がそうであるように、通常、女性を指さない。*Lovers* は男性である。したがって、原題の意味は「息子であり、かつ、恋人である者たち」のはずである。英語で *black and white* の順であるからと言ってこれを「黒白」と訳す人はいない。同様に、*sons and lovers* も日本語では必ずしもこの順を守る必要はない。「息子たちと恋人たち」ではなく「恋人たちと息子たち」の順であれば、今一つ意味不明ではあるものの、まだ少し原題に近づいたのではないかと思われる。紀要論文等に現れた題名訳の「恋しい息子たち」や「恋息子たち」のほうが *Sons and Lovers* の題名訳としては適切であると考えている。

1920年初版の *The Lost Girl* は、当初は「迷える乙女」との題名訳で扱われていた。「迷える子羊」を連想させる題名であるが、原題は *straying sheep* の *straying* ではなく *lost* であり、しかも主人公の女性は「乙女」から通常想起される年齢をやや過ぎた女性である。そこで D. H. ロレンス研究会は 1982 年、この作品題名を「墮ちた女」と訳して研究書を出版した<sup>19</sup>。巻頭の藤原満寿子論文が「はしがき」で *lost* の逆説的な意味を解説している。他には、*girl* を「女」と訳す点は共通しているものの、紀要論文等には「失踪した女」との題名訳も見られ、*lost* のどの意味を前面に出すかに苦心の跡が窺える。

本作品の翻訳書は、1997年に上村哲彦訳で出る。題名訳は『ロストガール』であった<sup>20</sup>。定冠詞以外をただカタカナにしたままの工夫のない題名訳と思われるかも知れないが、「ロストボール」などカタカナ「ロスト」が日本語において日常的に用いられるようになってきている現在、「ロスト」の意味を訳者が規定せず、読者の読みに任せるこの題名訳のほうが本作品ではむしろ適切であるように思われる。

2つ目の翻訳書も同じ 1997年に山田晶子訳で出版されるが、その題名は『アルヴァイナの墮落』であった<sup>21</sup>。「アルヴァイナ」は主人公の女性の名 (*Alvina*) であり、この名を題名という表に出したのは恐らく定冠詞の *the* を読んで、*the girl* が誰かを特定させたかったからであろう。とは言え、この固有名が神話上あるいは歴史上の誰かを想起させるのであれば題名としての広がりを持つと思われるが、筆者の知る限りでは、「アルヴァイナ」から想起される神話上の人物も歴史上の人物もない。

本章では最後に、Mollie L. Skinner と共作の *The Boy in the Bush* (1924) の題名訳にも言及しておきたい。オーストラリアを舞台とした小説であり、*bush* は言うまでもなく低木の「藪」ではなく、当地の森林地帯である。紀要論文等に現れた題名訳は、「叢林の少年」「森林の少年」「原生林の青年」などであるが、2015年に出版された翻訳書は『ユーカリ林の少年』であった<sup>22</sup>。18歳で登場する主人公を「少年」と見るか「青年」と見るかは難しいところであるが、「ユーカリ林」は舞台がオーストラリアであることを明確に示した思い切りのよい訳である。

<sup>19</sup> D. H. ロレンス研究会編、『ロレンス研究—「墮ちた女」』、朝日出版社、1982。

<sup>20</sup> D. H. ロレンス (1920)、上村哲彦訳『ロストガール』、彩流社、1997。

<sup>21</sup> D. H. ロレンス (1920)、山田晶子訳『アルヴァイナの墮落』、近代文芸社、1997。

<sup>22</sup> D. H. ロレンス & M. L. スキナー (1924)、大平章・戸田仁・青木晴男・田部井世志子訳『ユーカリ林の少年』、彩流社、2015。

## 5 The Plumed Serpent

最後にメキシコを舞台として書かれた作品 *The Plumed Serpent* (1926) を別枠で取り上げたい。日本では 1936 年、亀井常蔵・大石達馬訳『翼のある蛇』との題で翻訳が出版されている<sup>23</sup>。同年から翌 1937 年にかけて西村孝次訳の『翼ある蛇』も三笠書房から出されており、1950 年にはこれを改訂した『翼ある蛇』上・中・下巻が、伊藤整訳『チャタレイ夫人の戀人』を出版した小山書店から出版されている<sup>24</sup>。そして 1990 年には宮西豊逸訳の『翼ある蛇』が角川文庫から出版された。

当該長編の翻訳書題名は、「翼のある蛇」か「翼ある蛇」であるため、紀要論文等においても多くの場合、本作品の題名訳は「翼ある蛇」となっている。「翼ある蛇」から読者が想像すると思われる蛇は、一對の翼をもった龍のような生き物か、恐竜に翼が生えた、日本の怪獣映画のギドラのような生き物であろう。

本作品は当初 *Quetzalcoatl* との題名で書き始められたことが分かっている。*Quetzalcoatl* (ケツァルコアトル) は水や農耕に関わる蛇神で、後の時代には人類に文明をもたらした英雄神として崇拝されてきたアステカ神話の重要な神である。発掘されたメキシコのピラミッドには、太陽の神殿、月の神殿とともに必ずケツァルコアトルの神殿が立ち並んでいる。*Quetzal* は鳥と言う意味—実際、ケツァールと呼ばれるキヌバネドリ科の鳥がメキシコに生息している—で、*coatl* は蛇という意味である。そのため、鳥と蛇とが合体した生き物と見なされることから、翼の生えた龍のような大蛇を想像するのはやむをえないかも知れない。

作中では、*Quetzalcoatl* は主人公 Kate を通して次のように説明される。

The name of *Quetzalcoatl*, too, fascinated her. She had read bits about the god. *Quetzal* is the name of a bird that lives high up in the mists of tropical mountains, and has very beautiful tail-feathers, precious to the Aztecs. *Coatl* is a serpent. *Quetzalcoatl* is the Plumed Serpent, so hideous in the fanged, feathered, writhing stone of the National Museum. <sup>25</sup>

「翼(の)ある蛇」と訳した方は、この *plumed* や *feathered* を「翼をもつ」の意味で訳している。したがって、日本語訳の読者はケツァルコアトルが「翼をもつ蛇」であるところで理解することになる。しかし、いずれの語も「羽根が生えている」の意味であり、ケイトは「翼をもつ」とまでの説明はしていないはずである。

実際、ケツァルコアトル神殿で発掘されたケツァルコアトルとされる石像には、頭部に *garland* 様のものをまわっているが、翼があるようには見えない。また、ケツァルコアトル神として描かれている壁画にも翼があるようには見えない。ちなみに今日のメキシコの国旗には中央に鳥と蛇とが描かれているが、それは鷲が蛇を啜えてサボテンに止っている図であり、鳥の翼が生えた蛇の絵ではない。ケツァルコアトルとして伝えられる画像を見る限りでは、翼のある蛇ではなく、鱗が鳥の羽根状になっている蛇のように見える。

<sup>23</sup> D. H. ロレンス (1926), 亀井常蔵・大石達馬訳『翼のある蛇』上・下巻, 耕進社, 1936.

<sup>24</sup> D. H. ロレンス (1926), 西村孝次訳『翼ある蛇』上・中・下巻, 小山書店, 1936-37.

<sup>25</sup> D. H. Lawrence (1926), *The Plumed Serpent*, p. 64.



このような点をふまえ、D. H. ロレンス研究会は1994年当該作品の研究書を出すに当たり、「羽鱗」という語を新たに造り、題名を「羽鱗の蛇」と訳して出版した<sup>26</sup>。以降、紀要論文等にはこの題名訳も散見されるようになった。「羽鱗」という造語に至るまでには、当然のことながら「翼のある蛇」「翼ある蛇」以外の題名訳も検討された。英語 *plumed* の訳語から考えるならば、「羽毛のある蛇」が最も原題に近いが、問題は「羽毛」が日本語でどういうイメージをもたらすかであった。「羽毛」では、和英辞典の訳語にもかかわらず上質な羽毛布団などから *feather* ではなく、ふわふわで柔らかな *down* のほうを想起させる。「羽毛」から雛鳥を想起できても、蛇のイメージにはつながらない。他方、「羽根のある蛇」では、「羽根」は「翼」とも同義となるため、「翼ある蛇」と結果的には変わらない。そこで「羽鱗」との新たな造語に至ったしだいである。

当時の D. H. ロレンス研究会に属していた一人としてその責任の一端は筆者にもあるのだが、造語ではない日本語による適切な題名訳はできないものかとその後も個別に検討してきた。アステカ神話の解説書等ではケツアルコアトルは *the feathered serpent* とよく言い換えられている。この *feathered* を「羽根のある」以外のどのような日本語に言い換えるかが課題であった。

メキシコシティで人類学博物館と Teotihuacan (テオテワカン) のピラミッドを見学する機会を得た折にはできるだけ正確な情報を得たく、長年現地でガイドを務めておられる日本人の方に案内をお願いした。その際に「ケツアルコアトルに翼はあるか」との筆者からの問いに対しては明確に「ない」とのことであった。そして何より印象的であったのは、テオテワカンからの帰途、昼食に立ち寄ったレストランでは入口付近の立木に作り物の大蛇が巻き付いていて、その翼のない蛇がケツアルコアトルであると教えられたこと。そして食事中、日本にも興業で行ったことがあるという一組の夫婦がロレンスのエッセイ<sup>27</sup>に描かれているのと同じような伝統的と思われる民族舞踏を披露してくれたのであるが、女性が地を踏みならすようなステップで踊っているときに被っていた羽飾りの冠が *pluma* であると教えられたこと。ここで得た確信は、*plumed serpent* とは羽飾りの冠 *pluma* をまとった大蛇を指すというものであった。そうであれば、発掘されたケツアルコアトル神殿の *garland* をまとっているようなケツアルコアトル頭部の石像と矛盾はしないし、ケツアルコアトル神と見なされている画像とも一致する。アステカ神話の神が羽飾りの冠をまとっていることは、アメリカ大陸の先住民の姿を固定観念で思い描く人には分かりやすいはずである。

ケツアルコアトル神はヤマネコの帽子を被っているので、当初はヤマネコの帽子と羽飾りの冠とが相いれないように思った。ここで言うヤマネコは、*American Lion* (もしくは *mountain lion*) とも呼ばれる *puma* (あるいは *cougar*) のことで、ヤマネコの帽子とはピューマ柄のキャップのことである。しかし、メキシコの伝統的と思われる民俗舞踏を見たとき、踊り手がヤマネコの帽子を被ったうえで羽飾りの冠をまとっているのが分かり、矛盾はしないのが分かった。

以上のような観点から、*The Plumed Serpent* の題名訳としては「羽冠の大蛇」または「羽冠の蛇」が適切ではないかと思っている。「羽飾りをまとった大蛇」のほうが分かりやすいかも知れないが、原

<sup>26</sup> ロレンス研究会編、『ロレンス研究—「羽鱗の蛇」』、朝日出版社、1994。

<sup>27</sup> D. H. Lawrence (1927/1932), 'Dance of the Sprouting Corn,' *Mornings in Mexico/Etruscan Places*, Harmondsworth: Penguin Books, 1974(1950), 64-71.

題が3語の題名訳としては長すぎる。

### 結 ロレンス長編小説の題名訳

翻訳の難しさを示す具体例としてD. H. ロレンス長編小説の題名訳を取り上げてきた。これまでの検討結果から筆者が適切と考える題名訳を原作初版の年代順に整理しておく、

- The White Peacock* (1911) 『白い孔雀』  
*The Trespasser* (1912) 『侵犯者』  
*Sons and Lovers* (1913) 『恋息子たち』  
*The Rainbow* (1915) 『あの虹』  
*Women in Love* (1920) 『恋する女たち』  
*The Lost Girl* (1920) 『ロストガール』  
*Aaron's Rod* (1922) 『アロンの杖』  
*Kangaroo* (1923) 『カンガルー』  
*The Boy in the Bush* (1924) 『ユーカリ林の青年』  
*The Plumed Serpent* (1926) 『羽冠の大蛇』  
*Lady Chatterley's Lover* (1928) 『チャタレイ卿夫人の恋人』  
*Mr Noon* (1984) 『ミスター・ヌーン』

となる。

従来訳に異を唱えたところもあるが、「序」において述べた通り、それが本旨ではない。数語の題名を日本語に訳すだけでも難しい翻訳を長編作品のすべてにわたって成し遂げた訳者の多大な尽力に心から敬意を表すものである。

### 参考文献

- Angulo, Jorge, *Teotihuacan: City of the Gods: English Edition*, Mexico, D. F.: Monclém Ediciones, 1996.  
 Domenici, Davide, *The Aztecs: History and Treasures of an Ancient Civilization*, Vercelli: White Star, 2012.  
 Infante, Gonzalo, *Bailes Folkloricos de Mexico* (DVD Video), Mexico, D. F.: C/Producciones, publication-date unknown.  
 スズキ・コージ (絵)・船崎克彦 (文), 『ケツアルコアトルの道』世界の神話絵本<アステカ>, ほるぷ出版, 1997.  
 ポプラウスキー, ポール編著 (1996), 木村公一・倉田雅美・宮瀬順子訳編『D・H・ロレンス事典』, 鷹書房弓プレス, 2002.  
 ロレンス, D. H., 鈴木新一郎編訳『ロレンス紀行全集』, 不死鳥社, 1979.